

学部シラバス作成に関する教官の意見

太田武夫 下石靖昭 東 義晴 遠藤 浩 岡崎愉加

要 約

シラバスは、その内容も含めて、まだ教官にも、学生にもなじみのない言葉である。

著者らは、1994年、初めてのシラバス（講義要覧）を刊行した。このシラバスの中では、1人もしくは数人の教官によって、1教科・1学期分の講義の概要が各1ページの中に記載され、その枠組みは、基本的事項以外に、講義の目標、授業計画、教科書、参考書、授業の進め方、評価の方法、教官のメッセージから成るものであった。

このシラバス作成に参加した専任教官45人及び非常勤教官107人、計153人に対し、調査表によってシラバス作成に関する意見を求めた結果、117人(77.0%)の教官が解答を寄せた。その結果は次のようなものであった。

1. 今回の作成計画以前にシラバスについて認識があった者は44.5%であった。しかし、シラバスの今後の発行に関しては94.9%の者が賛成であった。今回の枠組みについてはほとんどの者が肯定的であった。
2. 学生による授業評価については、約半数(52.7%)が賛成であるが、時期尚早とする者が41.8%いた。

キーワード：シラバス, syllabus, 授業要覧, 授業概要, 教官の意見

はじめに

近年各大学でシラバスが盛んに発行されるようになった。文部省でも国立大学でのチェック項目のうち、教育方法の改善の一つとしてこれを挙げている。シラバス syllabus という言葉は講義概要、教授細目、授業計画などと訳されているが、どのような要件が満たされるべきものであるか定かではなく、各校での創意工夫が要求されているところであると思われる。

本学でも最近になってこの問題が討議され、1994年7月の教官会議でこれを発行することが決定し、ワーキンググループとしてのシラバス作成委員会（以下委員会という）が設けられた。

この委員会では、シラバスというものが、イメ

ージとしても個々人でまちまちであろうし、記入に当たって教官にも戸惑いがあると考えられるので、2段階の作成経過をとることとした。すなわち、まず第1に教官の相互点検を主目的として1994年度版を作成し、続けて学生を対象とした1995年度版を作成するというものである。編集を進める側にあつては、その経験とその過程での問題点を整理する機会を、また個々の教官においては他の教官のそれを参考にしながら再構成ができる機会を得ることになる。そのためには、作成過程での問題点をできるだけ整理しながら進める必要があるが、その一つの方法として本学教官および学外のシラバス原稿依頼者全員にアンケートによる調査を行った。以下はその結果をまとめたも

授業科目名		担当教官名	
対象学生		単位	必修選択別
授業の目標 および概要			
授業計画			
教科書			
参考書			
授業の進め 方			
評価の方法			
メッセージ			

図1 シラバスの枠組み

のである。

なおこの過程では、従来発行している講義概要と区別するため、講義要覧という言葉を使い、シラバスという言葉と併記して使用している。

対象および方法

シラバスの原稿は、1994年8月上旬に、締切りを同年9月10日として、図1の様式を指定して依頼した。専攻科についてはそれぞれ1週間遅れで依頼した。この際別に1枚のアンケート用紙を同封し回答を求めた。対象は本学専任教官45人と非常勤の教官および臨床実習指導者（以下非常勤教官という）107人である。本学専任教官はシラバス提出の有無にかかわらず対象とした。アンケートの質問は14問からなり、シラバスに関連した一般的質問4項目と、今回の記載方法に対する質問10項目からなっており、いくつかの選択肢を設けて回答を求めた。回答は無記名で行われた。

なお上記シラバスの様式の記載は、各教官に3.5インチ・フロッピーディスクを渡し、それにファイルして提出するよう依頼した。またそのディスクには汎用されているパソコン・ワープロシステムの一太郎バージョン4.3で作った枠組みをファイルとして入れており、出来る限りそれを使用するように依頼したが、他のハード（ワープロを含む）、ソフトあるいは手書きでも可とした。

結 果

アンケートの回答者は9月30日に回収を締切った時点で、専任教官42人（回収率93.3%）、非常勤教官77人（72.0%）で、併せて119人（78.3%）であった。

回答者の教育歴は10年未満39人（32.8%）、10～19年35人（29.4%）、20年以上40人（33.6%）、不明5人（4.2%）で、ほぼ3分の1ずつを占めた。

1. シラバスという言葉について

表1に示すごとく、今回とりあげるまでにこの言葉を知っていたとする者53人（44.5%）、知らなかったとする者63人（52.9%）で、後者の割合が

高かった。シラバスという言葉がまだ普遍的でないことが判る。また、専任、非常勤別に見ると、

表1 シラバスという言葉

	専任	非常勤	計 人 %
知っていた	26 (61.9)	27 (36.5)	53 (44.5)
知らなかった	16 (38.1)	47 (63.5)	63 (52.9)
NA			3 (2.5)
計	42 (100)	74 (100)	119 (100)

知った機会		
1	新聞・テレビなど	12 (22.6)
2	教師間の会話	9 (16.9)
3	書物	8 (15.1)
4	学内会議・集会など	7 (13.2)
5	学外会議・集会など	2 (3.8)
6	その他	15 (28.3)

差が見られ、専任教官の方が知っていたとする者が多かった。普段主として病院や保健あるいは研究施設で仕事をしている者にとっては、より馴染みの少ない言葉であるといえる。また専任教官の場合は、既に学内の討議の中で使われてきたので、「今回」がどの時点を指すのかは人により異なると思われる。

知った動機はさまざまな機会であったことが認められ、色々な情報の中でこの用語が広がりつつある現状であることが判った。

2. 今回の記載を通じての意見

表2に示した通り、従来持っていたシラバスのイメージと今回の様式が73%の者で一致しており、記載した上での様式に対する意見としては、全般的に高い率で肯定的な受け止め方がなされていることが認められた。しかし今回の記入上の手間については、手間がかかったとする者が33%あり、記載方式、提出期間、馴れといった点で煩雑さを感じさせていることが判る。

3. 記載方法について

今回の記載は、前述の方法によったが、提出された原稿の記載方法を分類すると、表3のごとくであった。標準に従った記載は全147人中83人（56.5

表2 今回のシラバス記載に当たっての意見

	人	%
1 持っていたイメージと		
ほぼ一致している	71	(73.2)
違っている	24	(24.7)
その他	2	(2.1)
NA	22	
2 記入の時間について		
手間がかかった	37	(33.0)
簡単であった	37	(33.0)
どちらも言えない	38	(33.9)
NA	7	
3 今回の様式		
基本的によい	104	(95.4)
変えるべきである	5	(4.6)
NA	10	
4 記入する内容は		
今回程度	97	(86.6)
もっと詳しく	8	(7.1)
もっと簡単に	7	(6.3)
NA	7	
5 変更すべき項目		
あり	14	(14.9)
なし	80	(85.1)
NA	25	
6 講義要覧(シラバス)という呼称		
よい	87	(80.6)
講義要覧のみ	16	(14.8)
シラバスのみ	5	(4.6)
NA	11	
7 A4版縦書きの用紙使用について		
よい	110	(98.2)
変えるべき	2	(1.8)
NA	7	
8 頁数について		
1ページ	99	(90.0)
2ページ	6	(5.5)
その他	5	(5.5)
NA	9	
9 枠組みについて		
よい	99	(95.2)
変えるべき	5	(4.8)
NA	15	
10 今回の記載方法(一太郎を標準とする)		
よい	98	(96.1)
他の方法	4	(3.9)
NA	17	

%)で、手書きは25人(17.0%)であった。1教科複数教官担当制の場合に、当然ではあるが、手書きの者が多くなった。他のパソコンではマッキントッシュ系、ワードプロセッサではキャノン系が多かった。この場合は標準の原稿へ変換が困難

なものが、少数ではあるが存在した。

表3 記載方法の分類

	人	%
指定 NECパソコン*及び一太郎 V4.3	83	(56.5)
指定以外	64	(43.5)
内訳 NEC*及び V4.3以外の一太郎	15	(10.2)
他のパソコン及びソフト	9	(6.1)
ワードプロセッサ	15	(10.2)
手書き	25	(17.0)

* NEC 以外の互換機を含む

4. 将来のシラバス発行と授業評価について

表4のごとく今後のシラバス発行については92.9%の者が賛成としており、専任、非常勤の両群ともに高率で、時期的にその機運ができているという結果である。しかし、学生による授業評価について全体の半数近くが時期尚早、もしくは反対と答えている点は注目される。

表4 今後のシラバスの発行と授業評価

シラバス	専任	非常勤	計
			人 %
今後発行すべきである	39 (92.9)	65 (94.2)	104 (93.7)
発行に反対	3 (7.1)	3 (4.3)	6 (5.4)
他	0	1 (1.4)	1 (0.9)
計	42 (100)	69 (100)	111 (100)
NA			8
学生による授業評価	専任	非常勤	計
心要	18 (45.0)	40 (57.1)	58 (52.7)
時期尚早	21 (52.5)	25 (35.7)	46 (41.8)
心要ない	1 (2.5)	5 (7.1)	6 (5.5)
計	40 (100)	70 (100)	110 (100)
NA			9

考 察

大学教育の今後のあり方を語る時、シラバスの必要性が、その主要な柱の一つとしてよく指摘される。¹⁻³⁾しかし一方、わが国の教育の実状や学生の受講態度から見れば、現状では少なくとも馴染まないのではないかという意見もある。⁴⁾また、シラバスとはどういうものか、我々の学内でも意見やイメージは教官によって異なっている。そのようななかで今回のシラバス作りはスタートしている。

本学では従来講義概要が年度当初に発行され、学生及び教官に配布されてきた。1994年度の場合、A4版1ページ当たり2～6教科が紹介され、234教科で53ページを要している。これは原稿を教務学生係へ提出し、そこで編集、印刷されてきた。言葉の訳だけでいうなら、これもシラバスということになるが、この内容は、教官にもよるが、授業の方針、テキスト、参考書及び注意事項が書かれている程度である。授業の流れの記載は少なく、内容も簡単である。

このような講義概要が既に出されている上での今回の作成に当たっての基本的立場として、1)シラバスになじみのない学生にまずは親しんでもらえるもの、2)学部の事情(複数教官による教科が多い)や諸条件(印刷費用など)を配慮したもの、3)これによって教官が堅苦しい拘束感をうけることがないもので、作成・提出にあたって負担感が少ないものであることを考えた。

以上のような観点から、他学のものを参考にしながら、実際の記入事項としては、これまでの講義概要の記載事項の上に、講義の流れと進め方、教官の評価方法が呈示されているものを想定して作ったのが図1の枠組みである。原則として1教科1期分(本学は前期、後期の2期制である)を1ページにするが、やむを得ぬ場合は2ページにわたってもよいとした。何人かの教官で1教科を教えることが多い学部柄、実際に1ページでは書ききれない場合もあり、主たる担当教官が整理し、まとめる努力を行った。授業が通年(2期)にわたる場合は、原則的に2ページを使用出来るとし、枠の中の横線は自由に上下することによって記載の配分を変えてもよいこととした。

さて、シラバスとはどういうものかについても、色々なイメージがあろう。他学での例では、本学の講義概要程度の内容でシラバスとしているところもあり、入手した米国のサンプルでは一冊の本の体裁で、一種の講義録の形をとっているものをシラバスと呼んでいるものもあるから、これは当然のことと思われる。

刈谷⁵⁾は米国の大学の例から、一般的なシラバスに含まれる情報として、1)基本的情報(授業

名、科目番号、教室、目的)、2)講師に関する情報(講師名、所属、研究室の場所と電話番号)、3)講義の目的、スケジュール(毎回のテーマと読んでおくべき文献などを含む)、4)成績評価の方法、5)文献の入手方法(図書館でのリザーブの有無など)、6)履修条件などがあるとしている。これらの項目には本学の現状に照らして見ると、現時点では記載しにくい、あるいは検討の余地のある項目がいくつかあることがわかり、シラバスの定着化と併せて今後検討、整備すべき問題と思われた。

またシラバスと関連して、米国ではその支援システムがあるとしているが、これが無い現状では教官に負担のみがかかってくることもあろう。

その意味で、今回のアンケートによる意見を検討することは、今後の効果的改善に役立つと考えられ、以下項目別にまとめる。

1. 記載様式について

今回のアンケートはシラバスを記載した後の意見を求めたものであるが、今後の発行については教官の合意がほぼ出来ているといえる。その場合、今回の様式も、手間の問題やいくつかの改善すべき点は別として、当面の編集指針として支持されていると思われる。

手間については、内容の量の問題ではなく、原稿に加えてディスクの提出を求めたためであろうと考えられる。またそのために記載要項も詳細になったことも原因であろう。これは印刷の経費削減を考えた試みであったが、今回の経験をもとにかなり改善出来る。また、書き手もイメージができた2回目からは、負担感が軽くなるであろう。

様式について改善点すべき点としては、枠組の窮屈さを指摘しており、枠組みが絶対的なものではないこと、他の記載例を参考に工夫してもらえればと思う。

記載内容についてはもっと詳しくという意見がある。これはより本格的なものへの指向であろうが、今回の執筆者の負担感やもっと簡単という声もあることから判断して、共通した様式としては当面この程度として、徐々に項目を加えていくの

がよいと思われる。また、実際には個々の教官がこれまでも詳しい授業計画を出している場合があり、それで補って頂くのも一考かと思う。

項目については、時間数、学期、講師紹介、教室などの表記をしてはという意見がある。

学期、教室などはシラバス作成時にはまだ決定していない可能性があって除外したが、記載可能であれば入れたい項目である。

講師紹介については、次回から簡単なものを入れてはと考えている。

2. シラバスの呼称について

委員会では、もし将来シラバスという言葉が普及するとしても、当面併用しようという趣旨で、日本語を主にして、シラバスを副に併記することにした。日本語は従来発行していた講義概要に変えて、イメージを新たにするため講義要覧を使用した。シラバスとってしまっているのかという躊躇もあった。シラバスという意見はまだ少なく、シラバス先進国のように大いに活用されるようになれば、これの単独使用も考えられ、それを目標にして欲しいと思われる。

3. 印刷について

A4版で1教科1期1ページということで、大部分の教官が賛成しているが、実際の印刷の費用などを将来は勘案してゆく必要がある。A4版反対の意見はB5版のほうが安いという理由であるが、使用勝手なども考慮して判断すべきであろう。

今回の内容は全教科234科目、ページ数は本文だけで271、それに学長による発刊の辞、目次、活用の仕方、学則抜粋、編集後記、索引を加えて印刷した。

本学の学生数500人、教職員数約200人分に加えて他への配布、予備分100として合計800部の印刷費は、毎年発刊するとしたら、今後運営上充分考慮してゆかねばならない問題である。経費次第では学生用には学科別の分冊も考えられる。

枠組みを変えたいとする数人の意見があるのも、印刷の便を考えて指定した一太郎の使用と関連しており、自由な記載、他のシステムの使用などを

可とすべきと指摘している。またその方が委員の労力を省けるとするものもある。枠を決めずに自由につくると、シラバスの使用目的から使い勝手が悪くなったり、書き手もかえって当惑するというのが、委員会の判断であった。これはハード、ソフトの指定にも見られるごとく、同じ活字で、同じ枠で、すなわち体裁を一定にすることによって、それを印刷所には依頼しないで、自分で作るという初期の設定にもよっている。また印刷にだすとき、全原稿をフロッピーに入れて出せば安くつくという想定に基づくものであった。実際、その作業は大変なもので、委員の労力は大きいものがあつた。また、印刷費についていえば、ページごとに独立している原稿であれば、原稿そのものをダイレクト印刷することで安く出来るということであった。フロッピーで依頼して経費の節約を計っている、本学の紀要の印刷の場合とは事情が異なることが判つた。

このことから、ハード、ソフトの指定はさほど意味がなく、書き手が一定の枠組の条件をキチンと満たした原稿を提出さえしてくればよいことになり、委員の責任も労力も軽減することが可能である。編集のための事務量としては、今まで教務学生係がやっていた講義概要より楽になるわけである。ただし本学の特徴である1教科を複数教官が担当する教科のシラバス作りと、手書き原稿の清書は依然として誰かの手に委ねざるを得ない。

4. シラバス作成の過程で考えられたこと

シラバス作成は3か月間毎週1回、計13回の委員会開催を通じて検討された。またその中では、シラバスの位置付けのみならず、教育のあり方についても話し合うことができた。シラバスは学生にとってのみならず、まず教官相互の認識を深め、自己の教科の自己点検につながるという実感が語られた。おそらく教官はある程度の面倒臭さを越えて、これを契機にその努力をしてくれるという予想もある。シラバスによって講義が堅苦しくなる面も考えられるが、そこはそれぞれの個性で克服できる程度であろうとも考えられた。

図書館の機能や参考書の整備ということが如何

に大事であるかということも語られた。参考書として挙げられる限り整備されなければならないからである。今回のアンケートでは設問されなかったが、その点を指摘する教官がいた。いずれ図書委員会で検討される事柄であろう。

カリキュラムの整備が不十分である点もいくつか見えた。今後指定規則に縛られる面もあろうが、自己評価等の結果等と併せて、可能な限り各学科で配慮されるべきであろう。

以上シラバスについて検討してきたが、学生による授業評価についての検討も重要であろう。

米国のMITの場合、授業評価の構成は、準備、説明、板書、援助の良否と総合評価という項目から出来ているという⁹⁾。

このシステムもわが国ではまだ普及していないが、シラバスが普及し、活用されればされるほど、それに照らし合わせて評価されるわけで、いわば表裏一体の関係ともいえる。

しかし今回の結果では、シラバスには賛成が多いが、学生の評価には時期尚早とするものが多い。これは何故であろうか。

すでにシラバスについて指摘⁴⁵⁾されているように、日米の学生の授業への態度、双方契約型の教師・学生関係の違いなどが理由として考えられる。また、大学進学までの主体性や批判力養成度の違もあろう。多くの教官が、自分の体験から、わが国の学生が現時点で積極的、建設的評価が可能かどうかについて否定的に感じているのではないだろうか。それを指摘している教官もある。

また講義のあり方の違いもあると思われる。その理由として、刈谷⁹⁾は通年性の授業が多いこと、履修科目数の多さ、文献へのアクセス・システムの脆弱さなどを挙げている。

今回のシラバスの内容から見ても、予習を必須として、その材料、範囲を明示している教科はきわめて少ない。これは本学の場合、国家試験との関連で、3年間に一定の単位取得を義務付けられる教科が多いということも反映しているといえる。与えられた期間に一定の知識と技術を詰め込まなければならない場合、どちらかといえば復習のほ

うが効率がよいという面もある。カリキュラムの改正で時間的ゆとりが云われ、単位取得にも緩和の傾向があるが、それは時間配分の上での話で、まだ講義の選択制にまで影響が到っていないという実状もある。その点、他の学部でも、例えば文系と理系、あるいは実験系と非実験系といった違いが同じような影響を与えているのではないかと思われる。

教官が授業評価によって消極的あるいは迎合的になるということも考えられるが、今回の調査では、その点を特に指摘する意見はなかった。

今回の結果から見る限り、学生による授業評価はその時期でないと判断できる。しかし将来を含めて必要ないとする意見は少ないのであるから、そのための条件を充たす過程こそが今後の重要課題になると指摘出来よう。

む す び

シラバスを短期間で作成する過程で種々のことが検討された。より親しめる、より効果的なシラバスにするために、既成のものにとらわれず、自学にあったものに改善を加えてゆくことが肝要であろう。そして教官同士、教官・学生間の日常的なパイプとしてこれが機能されることも望まれる。それが自己評価などと相まってより新しい展望を開くことになれば、それこそ本来のシラバスのイメージであり、目指すところというものであろう。

謝 辞

今回のシラバス作成およびアンケート調査は突然、しかも短期間で作業が行われたが、関係教職員の多大のご協力のもとに完成した。ここに各位に深甚の謝意を表します。

文 献

- 1) 石川英一：群馬大学で進めている、自己評価を基盤とした、全学的教育改革の現状と今後の予定。大学改革、朝倉書店、東京、101-104、1994。
- 2) 相磯秀夫：環境情報学部一新しい学際領域への挑戦。ibid、191-198
- 3) 佐々木慎一：教育・研究の活性化に向けて一大学に全き透明度を。ibid、343-345

- 4) 朝日新聞「標的」欄：本質論欠き「目新しさ」。朝日新聞1994年7月13日号
- 5) 刈谷剛彦：シラバスと大学の授業、授業評価。アメリカの大学・日本の大学。多摩川大学出版部，東京。132-154，1992.
- 6) 江沢 洋：大学と環境・歴史。大学改革，朝倉書店，東京。481-486，1994.

Faculties' ideas to the school syllabus

Takeo OHTA, Yasuaki SHIMOISHI, Yoshiharu AZUMA, Hiroshi ENDO, Yuka OKAZAKI

Abstract

The term 'syllabus' and its concept are not familiar to university faculty members and students in Japan. Authors who belonged to School of Health Sciences Okayama University, published the first syllabus in 1994. In this syllabus, an outline of each course for a semester was shown by one or a few faculty members. The framework consisted of the mark of the subject, schedule, textbook, reference book, how to teach, how to grade and message to students, besides basic information.

Forty-five full-time faculty members and 107 part-time faculty members were asked about their ideas for the syllabus through a questionnaire survey by mail and 119 faculty members (78.3%) responded to it.

Only fifty-three faculty members (44.5%) had known the term 'syllabus' before the time when they started to talk about it or were asked to write it. But after their presenting syllabi, 104 faculty members (87.4%) agreed to continue publishing and they were affirmative to framework as it was proposed this time.

As for evaluation of a subject by students, about half of faculties (52.7%) agreed and 51.8% of them replied that they were not mature enough for it yet.

Key words : syllabus, faculties' idea, evaluation by students

School of Health Sciences Okayama University, Committee for Syllabus Publication